

母親クラブの効果的な組織および運営の方法に関する研究

研究第7部 高橋 種 昭

吉 沢 英 子

研究第8部 星 美智子

高橋 重 広
淑徳短期大学

宇多小路 利 子
浅草寺福祉会館相談員

長 門 乙 彦
宮城中央児童館

はじめに

現代の母親は、過去の時代の母親に比べ、育児や教育に関する知識は、非常に豊富である。が、同時に、子供の養育について強い不安をもちながら、日々生活している母親が増えていることも、又、事実である。家族、地域に適当な相談相手をもたない母親達は、孤独をかこち、自己の世界に閉じこもり、不安を強めてゆくことになる。

こうした状態を改善するために、個々人を対象とし、個々の母親の動きに期待するようなやり方では、母親の安定した生活を期待することは不可能であり、地域の中にとけこんだ、まわりの人々との連帯のもとでの対応が考えられてゆかなければならない。このような意味で、母親クラブの如き地域組織の存在の意義は極めて大きい訳である。子供の養育の問題の多くも、母親同志の話し合いの中で解決されてゆくはずである。

子ども達にしても、彼等は、地域社会の中で育つもの

であり、そこから隔離したところで生活することは、不可能である。彼等は、地域の子どもや大人との接触の中で、社会生活の何たるかを学び、共に生活することの重要性を、理屈ぬきで学んでゆくはずである。母親クラブの活動を通じ、子ども達が、地域社会というものを肌で理解し、そこに生活する人々に愛情をもつことができるとしたら、それは、すばらしいことを彼等が学んだことになる。

又、最近では家族の養育機能が円滑に働いていないといわれているが、そうした機能にしても、家族の中でのみ止っていたのでは限界があり、広い社会的視野の上に立つことも不可能であろう。新しい時代に即応した積極的な型での育児なり教育は、やはり地域社会の人々との結びつきの中から生まれてくるものである。

このように、母親クラブの活動は、母親、子ども、地域社会にとって、極めて大きな意義をもつものであり、今後更に活発な活動が期待されるものといえる。

I 研究 目 的

今回の研究は、児童の健全育成を図るためには不可欠ともいえる母親を、中心とした地域組織活動の中でも、代表的な存在である母親クラブの活動を、更に強化し有効に働かせるには、如何なる組織、運営がなされなければならないか、ということの解明を目的としたものであ

る。

そのために、現在の母親クラブの実態調査を通じて、組織、運営における問題点や留意点を明確にし、母親クラブの指導指針作成上に必要な資料を得ようとするものである。

II 研 究 方 法

研究は、次の二つの方法で行なった。

(イ) 質問紙調査

質問紙調査は、全国の母親クラブから、各県10~20を選び、138の母親クラブに質問紙を送付し、リーダーの

意見を聞き、更に、秋田県と愛知県では、母親クラブのメンバー約500名にも質問紙を配布し、回答を求めた。回収率は、80~90%であった。

一方、児童館が母親クラブとどのように結ばれているかをみるために、全国の児童館と、児童館との連携のもとに活動を行なっている母親クラブに質問紙を送付し、回答を求めた。この調査の回収率は40~50%であった。

(ロ) 面接調査

面接調査は、秋田県では、全県の母親クラブから、それぞれ1~2名のリーダー及び母親に集まってもらい、地域の実状について報告を求め、行政の在り方などについて討議を行なうと同時に、協和町、雄名町の2ヶ所で母親達と話し合いの機会をもった。

愛知県では、豊田市で2ヶ所、元好町で1ヶ所、計3ヶ所の会場で、母親達50名を対象にした話し合いを行った。

III 調査結果・母親クラブの現状

1. 調査目的・対象

児童の健全育成を効果的に展開するためには、行政機関の活動と同時に、地域住民による積極的な地域組織化活動が必要不可欠である。母親クラブは、戦後、地域住民の自発的な発想として、母親クラブ、母の会、親の会等の名称のもとに各地で組織化され発展してきた。昭和23年には、厚生省児童局から「母親クラブ結成及び運営要綱」が提示され、公的施策として推進されてきた。昭和48年3月31日現在、41都道府県に21,456の組織があり、会員数が1,565,330人に達している。

本調査は、母親クラブの実態を解析し、クラブの組織及び運営上の効果的な要件を抽出することにより、活動の指導指針を作成するための基礎的データを集積しようとするものである。実態把握のため、次のような調査を実施した。

- A. 母親クラブのメンバーを対象とした調査
- B. 母親クラブのリーダーを対象とした調査
- C. 母親クラブのメンバー、リーダーとのグループインタビュー
- D. 児童館と連携している母親クラブの調査
- E. 母親クラブと連携している児童館の調査

Aのメンバー調査は、全国の母親クラブのうち、「クラブの結成年次が古い県」と「クラブの結成年次が新しい県」の理念型をつくり、この条件に、最も近い県として、秋田県と愛知県を抽出した。これらの県から、221(回収率88.4%)、249(同99.6%)の回収標本を得た。

Bのリーダー調査は、全国各地に亘る13県の母親クラブのリーダー133人(同96.4%)の回答を得た。このうち、市部で生活している者56%、郡部で生活している者43%である。

Cのグループインタビューは、メンバー調査、リーダー調査を実施した秋田県、愛知県において研究スタッフが直接、メンバー、リーダー、行政担当者とのグループ

インタビューを実施した。これらの資料は事例としても使用している。

Dの調査は195、Eの調査は106の回答を得た。

2. 調査結果

A メンバー調査

①メンバーの個人的状況

母親クラブに参加している母親達の年齢は、第1表の如く、20代までの若い母親は少なく30才代が70%を占めている。これは、第2表の子どもの年齢と合せて考えれば、活動内容、プログラム作成に、いくつかの手がかりが得られることであろう。

第1表 メンバーの年齢 (%)

年 令	県 別		
	秋 田	愛 知	計
20 才 未 満			
20 ~ 29 才	10.0	5.2	7.4
30 ~ 39 才	57.4	82.0	70.5
40 ~ 49 才	27.6	12.4	19.6
50 才 以 上	4.5	0.4	2.3
N. A.	0.5	—	0.2
計	100.0 (221)	100.0 (249)	100.0 (470)

メンバーが現在の地に居住するようになって何年になるか、との設問への回答が第3表である。秋田の方が居住年数の長い率が高く、そこからクラブへの所属年数も長くなり(第4表)、又、活動への期待、評価の面でも、地域への関心が高くなっている(第8表、第10表)。大都市のように流動のはげしい地域では、住民意識は育ちにくいといわれているが、そのことが、うなづける一つの資料と考えてもよいであろう。

②クラブへの入会契機と参加状況

第2表 子どもの数、年令別

	第1子		第2子		第3子		第4子		第5子		計			
	秋	愛	秋	愛	愛	秋	秋	愛	秋	愛	秋	田	愛	知
0～2才	6	1	17	2	10	11		2			33	6.8%	16	2.8%
3～5才	17	5	28	47	8	28		1			53	10.9	81	14.3
6～11才	69	131	70	136	28	31	4	2		1	171	35.1	301	53.3
12～14才	51	59	34	34	7	7					92	18.9	100	17.7
15才以上	76	46	43	7	11	2	4	1	2	1	136	27.9	57	10.1
不明	1		1	7		3					2	0.4	10	1.8
計	220		193		64		8		2		487	100.0	565	100.0

第3表 在住年数

年数 \ 県別	秋田	愛知	計
3年未満	1.8	10.8	6.6
3～10年	21.3	34.1	28.1
11～20年	32.6	40.3	36.5
21～30年	19.0	4.8	11.5
31年以上	25.3	7.6	16.0
N. A.		2.4	1.3
計	100.0 (221)	100.0 (249)	100.0 (470)

第4表 所属年数

年数 \ 県別	秋田	愛知	計
1年未満	19.5	28.1	24.0
1年	8.1	35.8	22.8
2年	17.2	26.9	22.3
3年	15.8	2.4	8.7
4年	9.0	0.4	4.5
5年以上	30.4	0.4	14.5
N. A.		6.0	3.2
計	100.0 (221)	100.0 (249)	100.0 (490)

クラブへの所属年数は、秋田では5年以上が30.4%を占め最も多く、愛知では1年台が35.8%で第1位である。入会の契機は、両県共、「人からすすめられて」が大きなウエイトを占めているが、それには、「活動内容

を聞き、積極的に入会した」と「すすめられてなんとなく」「断りきれずに」など、さまざまな動機が推察できる。この参加の契機をさらに「依存的タイプ」「主体的タイプ」「消極的タイプ」に分類しなおしてみると、秋田では、47:35:17%、愛知では48:21:24%となり、秋田では主体的タイプ、愛知では消極的タイプが多いことが注目される。

第5表 入会契機

入会契機 \ 県別	秋田	愛知	計
自ら意義を感じて	33.5	21.3	27.0
人からすすめられて	46.5	48.3	47.5
広報や新聞をみて	1.4	—	0.6
なんとなく	8.6	11.2	10.0
おしつけられてやむをえず	0.5	2.4	1.5
知らないうちに会員になっていた	7.7	10.0	8.9
その他	1.8	1.2	1.5
N. A.		5.6	3.0
計	100.0 (221)	100.0 (24.9)	100.0 (470)

クラブ活動への参加の状況は第6表にみる通りであるが、入会契機との関連でみてみると、「主体的タイプ」の参加回数の多いことが分り、参加回数という表面的事象のみで考えることの危険性はあるにしても、主体的参加の重要性がうなづける。

母親がクラブ活動に参加することを、家族の者がどのように受けとめるかは、参加の状況への影響も大きいと思われる。第7表に現われているが「まあ、協力的」と「よく理解し協力してくれる」の家族からの支援がある

第6表 参加回数

県別		秋田	愛知	計
参加回数				
1	回	74.1	40.9	56.4
2	回	15.8	28.6	22.8
3	回	3.2	6.0	4.7
4	回	0.5	0.4	0.4
5	回以上	0.5	—	0.2
N.	A.	5.9	24.1	15.5
計		100.0 (221)	100.0 (249)	100.0 (470)

第7表 家族からの支援

県別		秋田	愛知	計
支援の状況				
	よく理解し協力してくれる	40.7	26.5	33.2
	まあ、協力的	53.8	45.0	49.2
	無関心	5.0	20.9	13.4
	反対する人がいる	0.5	0.4	0.4
	N. A.		9.2	3.8
計		100.0 (221)	100.0 (249)	100.0 (470)

グループは、秋田では95%、愛知では72%、反対に「無関心に「反対する人がいる」の支援のないグループは6%と21%になっている。ここでの差は、愛知に比べ、秋田の方がクラブの歴史が長いこと、親の会として地域ぐるみ、家族ぐるみのプログラムを展開していることなどによるのではなからうか。

③クラブへの期待と評価

クラブへの参加時、活動にどのような期待をもっていたか、ということは、母親達のクラブへの認識を知ることができると共に、活動のあり方を考えるポイントになるともいえる。両県共、「子供の育て方や、教育についてより多く学べると思った」と、母親自身の学習が最多で、秋田では3割弱、愛知では2割強の母親が「地域の子ども達のために役立つと思った」と、地域的な連帯に目を向けている。これを年齢別に目を向けてみると若い母親ほど「地域の子ども達のために役立つと思った」が少なくなっており、注目しなければならない点であろう。

そして、母親達が実際にどのような活動に参加しているか「あなたは、主にどのような活動に参加しますか」

第8表 クラブ活動への期待

県別		秋田	愛知	計
期待				
	子供の育て方や教育について、より多く学べると思った	44.2	46.5	45.5
	近所づき合いが深められると思った	22.5	17.9	20.1
	地域の子供たちのために役立つと思った	28.9	21.9	25.2
	その他	2.0	3.6	2.8
	別に何も期待しなかった	—	3.6	1.9
	N. A.	2.4	6.5	4.5
計		100.0 (253)	100.0 (279)	100.0 (532)

第9表 クラブ活動への参加内容

県別		秋田	愛知	計
活動内容				
	児童の事故防止活動	20.4	11.6	16.0
	読書活動	2.0	2.5	2.3
	親子のレクリエーション	32.8	44.7	38.6
	育児や教育に関する学習活動	17.1	11.3	14.2
	会員相互の親睦	24.9	18.1	21.5
	その他	2.2	2.8	2.5
	N. A.	0.6	9.0	4.9
計		100.0 (357)	100.0 (354)	100.0 (711)

の間により得られた結果は、第9表の通りである。

「現在、母親クラブの活動を通して、あなたは、どのようなことを感じていますか」という問により、現在の活動に対する評価を求めてみた(第10表)。「自分の向上に役立っている」「活動が楽しみである」「地域の役に立っていることが嬉しい」の積極的評価グループと「人間関係がわずらわしい」「活動内容が思うようでない」「無駄と思う」「今すぐやめたい」の消極的評価のグループとの割合は、秋田では、88:9%、愛知では73:12%と、前者に積極的評価の割合が高く、後者に消極的評価の割合が、やや高くなっている。

「あなたは、リーダーとしてどんな人がよいと思いますか」として、メンバーの求めるリーダー像を問うてみた。秋田では、「積極的に行動する人」63名、「リーダーシップのある人」53名、「会員の気持をよく理解する人」33名、「誰からも好かれる温厚な人」30名、「協調性のある人」23名、「秘密が守れ相談しやすい人」15名

第10表 クラブ活動への評価

評価内容	県別		
	秋田	愛知	計
自分自身の向上に役立っていると思う	32.7	31.9	32.3
会員と協力してする活動が楽しみである	38.6	35.0	36.8
地域のため役立っていることが嬉しい	16.9	6.1	11.4
人間関係がわずらわしい	0.8	2.2	1.5
活動内容が思うようでない	7.5	7.5	7.5
無駄であると思う	—	1.8	0.9
今すぐやめたい	0.4	0.4	0.4
その他	2.3	4.0	3.1
N. A.	0.8	11.1	6.1
計	100.0 (266)	100.0 (279)	100.0 (545)

「責任感のある人」15名、「信頼される人」15名などである。

愛知では「リーダーシップのある人」45名、「他人の意見をよくきき、相手の身になり、物事の判断のできる人」24名、「積極的な人」21名、「人から好かれ信頼される人」17名などである。両県共無解答が101人、113人とかなり多い。リーダーに対する期待が低いいためか、あるいは、関心がないのかよくわからないが、いずれにしても注目すべき事項である。

B リーダー調査

①母親クラブ結成の契機と組織形態

クラブ結成の殆んどが、昭和48年度以降で63.9%、27年度からのものは5.3%である。国庫補助による母親クラブ活動要綱が厚生省より出されたのが48年度であり、これが契機となっていることが明らかである。

活動への参加率は、第11表のように高くなっている。この高率の背景には、二つの意味が潜在していると考えられる。その一は、全く行政指導型で、すすめられての出席であること、その二は、行政指導により母親の主体性が発揮されている場合である。現実には、後者は少ない。クラブ結成の契機（第12表）を考え合せ、現段階では、状況判断のもとに、適切な行政指導がなされることにより、母親の主体性を創り出す機能が求められているといえよう。

クラブ組織のタイプは、大きく分け、タテ型とヨコ型、あるいは、官僚型と相互関係型に二分できる。第1図のタテ型67.6%、第2図のヨコ型32.3%になっており、前者は行政主導型の契機をもつクラブに多くみられ

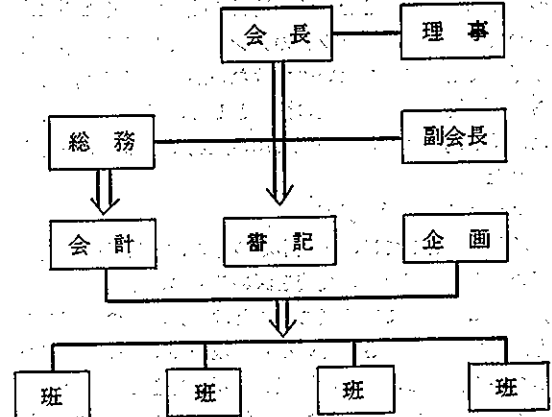
第11表 参加率

参加率	実数	%
40%以下	7	5.3
41 ~ 50	9	6.8
51 ~ 60	7	5.3
61 ~ 70	19	14.3
71 ~ 80	18	13.5
81 ~ 90	15	11.3
91 ~ 100	55	41.4
わからない	3	2.3

第12表 クラブ結成の契機

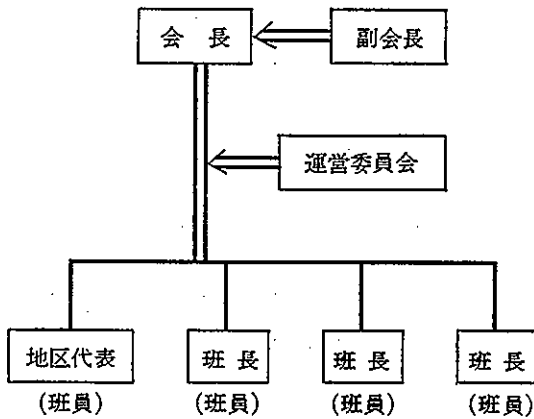
契機	実数	%
役所指導	57	42.2
母親自身の自主的動き	20	14.8
役所+母親の主体性	47	34.8
その他	11	8.1

第1図 タテ型



る。第13表にみられるようにメンバーの年齢は、幼児、小学校低学年児をもつ母親が78.2%と大部分である。現時点ではこの年齢配分は当然のことといえるが、将来子どもの年齢と共に脱会する結果になる。座談会の席上での声にもあったが、地域につながりをもっていくには、子どものためになる活動ならば、子供の年齢に関係なく参加していきたいという声もあった。これについては、幼児、小学生をもつ母親が中心であっても、地域の子ども

第2図 ヨコ型



第13表 メンバーの年令

年令別	実数	%
21 ~ 30 才	48	36.1
31 ~ 35 才	56	42.1
36 ~ 40 才	23	17.3
41 才以上	3	2.3
N. A.	3	2.3

の育成に対する関心を高め、連帯を強めていくために、かつての中心的母親クラブのメンバーとして、高年令児の母親でも参加してよいのではないかと。秋田では、これらの点を考慮して、「親の会」として、父親の参加と共に、年令的に50才以上の祖父母の立場での参加も多くみられた。

②プログラムの活動展開

活動内容としては、子供中心のもの、親自身の教養を高めるもの、親と子の交流を深めるもの、その他がプログラムに組まれている（このことは、D、Eの調査からも同様の結果が出されている）。親子間で、役割分担をしながら活動し、親子の相互間で新発見をしあいながら活動展開をしている、頼もしい状態のものも見受けられた。親子間のつながりを核とした、プログラム活動により、更に地域社会の住民の相互関係を通じて連帯が生まれるような、ダイナミックなプログラム活動が望まれよう。

活動後の評価は、どのような方法でなされているか。その多くは、役員会での反省会69.1%、アンケートなどによるもの15.1%となっている。前者でも、活動の分析、子どもや参加者の状況分析まではしていない。いわゆる感想程度のものである。簡単なスケール方式を用い

た評価の様式を考慮し、それによって意欲的に次の活動にのぞめるリーダーとしての姿勢を向上させる方途を考える必要がある。同時に記録のとり方などの指導も必要なのではないだろうか。

プログラム活動をすすめていく過程で、地域内の他の団体との交流の有無をみみると81.2%が何らかの形で交流の機会をもっていることがわかる。ただし、この交流のし方が問題である。ある地域では、既存の子ども関係の団体と対立的関係になっていることもある。地域の実状に合せて、既存の団体の機能の中に母親クラブの機能を充分とり入れられることもできるのではないかと。要するに、地域社会の子どもとして、健やかな成長をはかるための母親をはじめとする地域の大人の働きかけが、その主たるねらいであることを忘れてはならない。

第14表 交流のある組織

組織	%
子ども会	24.4
婦人会	19.9
P. T. A.	16.6
町内会	13.3
老人クラブ	8.9
青年団	7.4
B. G. スカウト	1.5
宗教関係	0.6
赤十字奉仕団	0
その他	7.7

それがどのような内容での交流か、をみると、母親クラブ活動への理解と協力を求めるもの30.1%、相互交流をはかるもの28.8%、その他、施設や部屋の活用、資料の借用、資金の援助を得ることを目的とするもの29.8%となっている。交流の初期の理由は何であれ、それを契機に地域社会での子どもに関する活動の相互連携のできる雰囲気を作り出す努力をすることが必要である。交流をもっていないクラブの62.9%が今後計画したいと述べていることは、今後の動きを期待し得るといえることになろう。

③グループの維持とリーダーの在り方

母親クラブの組織化を考える時、その核となり得る小集団のあり方とリーダーの機能の仕方が、そのキーポイントといえるであろう。まず、グループの維持を持続していくための一つの尺度として、参加率が考えられる。

第15表 参加の割合

	実 数	%
こ く 一 部	36	27.1
3 割 ぐ ら い	29	21.8
5 割 ぐ ら い	24	18.0
7 割 ぐ ら い	25	18.8
全 員	17	12.8
N. A.	2	1.5

第15表に現れているように3割以下48.9%である。地域住民のうち、対象年齢児童（小学校生徒をもつ母親）の3割以下ということは、決して望ましい率とはいえない。知らないうちに会員になっていたとするクラブもある。グループの維持のための条件に、メンバーの一人一人の参加意識が明らかにされていないところでは、長続きする術もないと言っても過言ではない。まず、クラブの意義をはっきりふまえ、無理のない状況下で働けることが、大切であることを忘れてはならない。

第16表 リーダーの選出方法

選出方法	%
役員がすいせん	25.0
前任者のすいせん	3.7
会員間の話し合い	66.9
その他	4.4

リーダーの選出方法は、そのほとんどが会員間の話し合いになっているが、果して、話し合いのプロセスを充分ふんでいるかどうか疑問である。欠席裁判で決められたという声もあった。役員を推せん、前任者の推せんのいずれも、その内容は、行政指導にあたっている人のすすめ、あるいは、やや命令的な状況下で受けさせられるという例が少くない。

現時点でリーダーとしての悩みは、第17表によっても分るように、第一が、メンバーが積極的でないことである。それに加え、サブリーダーがいないし、リーダーとしては、非常に緊張を余儀なくされていることになる。

活動への理解がまちまちである、専門家の協力がな、地域の人々や関係機関の協力が得られないなど、リーダー自身の問題より、外側条件不満が、悩みとして大きく影響していることがわかる。会員が積極的でない、定着性がなく入れかわりが著しい、会員数が少ないなど

第17表 リーダーとしての悩み

	実数	%	M. A.
1. 会員が積極的でない	51	21.2	38.3
2. 積極的なサブリーダーがいない	36	14.9	27.1
3. 財政的に運営が困難	34	14.1	25.6
4. 指導、助言してくれる専門家がいない	23	9.5	17.3
5. 活動への理解がまちまちでまとまらない	17	7.1	12.8
6. 活動する場(施設)がない	12	5.0	9.0
7. 会員数が少ない	11	4.6	8.3
8. 会員に定着性がなく、入れかわりが著しい	11	4.6	8.3
9. 地域の人々、機関の理解、協力が得られない	7	2.9	5.3
10. プログラムや企画についての戸迷い	7	2.9	5.3
11. 人間関係がよくない	2	0.8	1.5
12. その他	14	5.8	10.5
13. 別に悩みなし	15	6.2	11.3
N. A.	1	0.4	0.8

(注) M. A. … 2種以上の回答をしたものを、調査回数で割ったもの

は、リーダーとしては深刻な問題である。これらの点は、多分に行政指導のあり方の検討が必要であろう。すなわち、スーパーバイザー（クラブリーダー）の機能を果し得る担当者の配置が望まれるのである。まだ形態のみ整えたクラブは、リーダーが苦勞するばかりでなく、その苦勞が実らず、グループそのものも長続きしないという結果を生み出すといえよう。

リーダーの機能という点を考えてみると、その前提に第一に、人間としての自己をみつめ、自己理解のできる状況を作り出すこと。第二には、集団維持機能であり、集団に対する最低限度の知識と技術を身につけ、学習し再び、身につけていく過程を通して日常の努力が、要求されるのではないだろうか。第三は、プログラム展開能力が必要だと思われる。つまり、管理能力が肝要である。

行政とのかかわり、という点について、まず、母親クラブから地方自治体への期待については、第18表の通りである。そこに示されている行政の役割は、物理的、経済的、人材提供による援助が期待されている。活動費の補助は、ある程度の割合をはっきりさせて、地域社会では、可能な限り住民自らの枠の中での創造が前提とならなければならない。

第18表 地方自治体への期待

	%
活動費の補助	30.7
活動の場の設置	10.2
活動の資料の提供	9.5
リーダーの養成	24.5
専門職員の養成と配置	23.0
その他	1.1
N. A.	1.1

第19表 活動の利用施設

	実数	%	M. A. %
児童館	71	37.0	53.4
公民館	42	21.9	31.6
幼稚園・保育園	28	14.6	21.5
学校	16	8.3	12.0
神社・寺院	7	3.6	5.3
福祉センター	6	3.1	4.5
婦人会館	1	0.5	0.8
その他	21	10.9	15.8

リーダーの養成24.5%、専門職員の養成と配置23.0%は、非常に大切な行政への示唆と受けとってよいのではないか。又、活動の場の設置10.2%が結果していることは、できるだけ整備、指導することが必要であり、行政の機能は住民と共に協働の体制が整えられ、民間が動きやすい条件整備は充分になされてしかるべきではなからうか。このことは、調査Dの母親クラブから児童館への要望についての項目で、「児童館の増設と施設・設備の拡充をはかってほしい」43%、「児童館職員の増員とクラブへの援助協力を期待する」37%という数字からも、同様のことがいえる。

第19表が、活動の際利用する施設であるが、その多くは、児童館、公民館、幼稚園・保育園であるが、そこには、文部行政、厚生行政との関連をスムーズに運べるようにしなければならないという難問がある。母親クラブの運営にあたっては、一応、児童館を活動の拠点にしていくことが前提条件としてあげられている。しかし、調査D、Eから出された結果のように、母親クラブの会合では、児童館長が座長、司会としてすべてを指示し、児

童厚生員が会場作り、走りづかい、記録作成をするといったような現状では、クラブへのアプローチは、あまり意味を見い出すことができない状況である。

第20表 困った時の相談機関・人

	%
夫	7.4
友人	2.0
会員の中の誰か	22.3
児童に関する専門家	4.5
民生委員	7.9
学校の先生	8.9
福祉事務所(職員)	11.4
児童館(職員)	19.8
社会福祉協議会(職員)	6.4
その他	9.4

第21表 困った時、相談できればよいと思う人、機関

	%
会員に	8.3
児童の専門家	16.7
学校の先生	8.3
福祉事務所職員	16.7
児童館職員	41.7
社会福祉協議会	8.3

次に、リーダーが活動上困った時の相談相手としては第20表に明示されている。又、第21表にもみられるように、公的機関の職員に58.4%と期待している。これらの状況をふまえて、児童館職員、福祉事務所職員の地域児童担当者の現任訓練などの強化が望まれよう。それに加えて、社会福祉協議会職員オルガナイザーの機能も合せて考えることも必要である。つまり、地域の組織化をはかるためには、チームの組める諸機関、団体、施設の担当職員の質の向上と諒解点をどこに求めるかの基礎づくりのできた上で、考えられていくべきである。

C グループ・インタビュー

【事例】 1) 秋田の場合

秋田県主催による「親の会代表者会議」での代表者の発言の中から、K氏の発言の要旨を簡単に紹介してお

く。

K氏の所属する親の会は、次のようなきっかけで結成された。数年来、子ども達が毎朝ラジオ体操を熱心に続けている姿に、親が協力して、何か子どものためにしてやりたいという声広がったのである。会結成後は、子ども達の日常的なラジオ体操を支援する活動を基盤に、計画的に、地域の親と子の交流プログラムが拡大し、展開されてきている。より効果的に活動を展開するために、K氏は、行政への期待として、1) 他の親の会などとの交流の機会を積極的に設けたらどうか。それぞれの親の会は、地域的な特徴をもちながら活動している。だが、いつの間にか形骸化した活動になってしまう恐れもある。他の会との交流活動を通じて、お互いに啓発されることが多いと思う。2) 地域の親と子が、気軽に利用できるキャンプ場、宿泊施設などを設置してほしい。

(社会資源の整備)、3) 親のリーダー講習会等を開催すべきだ。親自身の成長が子どもの育成には不可欠なことである。子どもはどんどん時代に即応しつつ成長する。親のリーダー講習会等を通じて、新しい知識や指導方法を身につける必要がある。

【事例】2) 愛知の場合

前述した如く、クラブの会員になる契機の殆んどは、積極的な態度での参加でない。ここに紹介するクラブは、市の担当者F氏により、まず母親クラブの主旨の徹底をはかることから始められたクラブである。F氏は、市内で催されるあらゆる子どものための会合、講演会などの際に出向き、母親達の声をきくと共に、クラブの内

容を話してきた。時期をみて、市からの呼びかけとして、「母と子のつどい」を開催した。それを契機に母親達が、その必要性を体感し、自主的に集いをもつようになった。遊園地に対する関心、子ども達の遊び場に対する関心が高まり、花壇作りなども始まった。婦人会の一部の人が参加したり、PTA関係者、保育園・幼稚園の関係者などが相互に声をかけ合って、任意参加ではあるが、70名をこえる参加がみられている。

市の担当者は、常に次のような呼びかけをし、助言をしている。その一つは、「子どもは子どもとしての生き方がある」そして「母親は母親としての立場がある」この両者のことを母親としてよく吟味し、どのような働きかけ、活動をしたらよいか、考えることが大切である。

その二は、「母親としてどのようにしたら子どもの心と触れ合うことができるか」触れ合いとは「どんなことを意味するのか、意志疎通とは、何をもちええるのか」などを考えさせる機会を与えている。その結論にも近い母親達の回答が、とにかく「話し合える場」を作ることだ、との自覚のもとに、クラブの動きが開始したのである。

母親自身が、まず実感を得、それをなしつつ、どのように子どもに、又、家庭にそれをもちこんでいったらよいのかなど、日頃の生活のリズムにのった活動をしている。結成後まだ2年、これからのクラブの展開が大きな課題となろう。グループ運営、組織上の問題を母親自身が克服できる策地をいかに作り出していくが、行政指導の方向とアプローチの具体的指導が必要とされよう。

IV 母親クラブのあり方(意義)

1. 母親にとっての意義

現代の母親は過去の時代の母親に比べ、育児や教育に関した知識は、非常に豊富である。このことは、母親の学歴の著しい向上と、マスコミによる情報提供の機会の増加という二つの条件によるところが大である。農村地帯においては、かつては母親が小学卒のケースが圧倒的に多かったが、現在では高校生が増えており、都市部においては、大学の卒業者が増加の傾向にあるのが現状である。しかし、同時に育児や教育について、不安を感じながら、子どもの養育に従事している母親が増えていることも事実である。母親であって母としての機能を果たしていない母親の増加ということがさかんに言われるが、母親としての自信を失い、育児や教育の目標を見失って、右往左往している現在の状態では、そうしたことをいわれても仕方がないともいえる。

更に、家庭内や地域に適当な相談相手をもたぬ母親達は、常に孤独をかこち、自らの世界に閉じこもり、不安を強めてゆくことになる。この他、現在の地域環境は、一歩外に出れば危険がいっぱいで、幼児が一人で外に出ることは、命がけのような地域も少なくない。

こうした事態の中で、母親達の生活を改善し、望ましい方向に向けてゆくためには、個人個人を対象とし、個人個人の動きに期待するようなやり方では、母親の不安を取り除き、安定した生活を期待することは不可能である。やはり、地域の中にとけこみ、周囲の人々との連帯の下で、安定した生活をつくるべく努力しなければならない。そうした意味で母親クラブの如き地域組織の存在の意義は極めて大きい。子どもの問題についての話し合いの中で、その多くは解決されてゆくはずである。そして、事故防止の運動にしても、地域の母親達が手をつないで、子どもを守ることをしなければ、幼い命を守るこ

とは不可能に近いであろう。

2. 子どもにとっての意義

子どもにとって母親クラブは如何なる意義をもつかということは、母親にとっての意義と裏腹の関係にあるものである。母親がしっかりした養育を行なうことが可能になれば、子どもは当然順調な発育なり発達を遂げることになるであろうし、母親達が手をつないで安全確保のための活動を行なえば、子どもの生命は保障され、日常生活を安全な環境の中で安心しておくことが可能になる訳である。又、読書活動のような活動は、子どもの教養を深め、豊かな人間性を養う基礎となるであろうし、親子の交流活動は、子どもと親との愛情関係の確立に寄与し、両者の間のつながりと理解を深めるために大いに効果があるであろう。

いずれにしても、子どもは地域社会の中で育つものであり、そこから全く隔離したところでは決して生活することはできない。地域の子どもや大人達との接触の中で、社会生活の何たるかを学び、共に生活することの重要性を理屈ぬきで学んでゆく。最近、子どもの世界にまで大人の場合と同じように、誤った形での個人主義が浸透し、地域の人々との連帯が崩れつつあるといわれるが、もし、成長期にそうした生活経験をすることになれば、成人したあかつきにおいても、地域を愛し、協同して自分達の生活を守る術を身につけた人間は育たないであろう。人と人との結びつきは、決して一朝一夕にできるものではない。日頃の生活の積み重ねの上に初めてつくられるものである。母親クラブの活動を通じ、子どもたちが地域社会というものを肌で理解し、そこに生活する人々に愛情を持つことができたとしたら、それは彼らにとって素晴らしいことを学習したことになる訳である。親子の交流活動を通じて得られた人間に対する愛情は、地域の人々の結びつきの中で、更に高められ深められることが期待される。

3. 地域社会にとって

地域社会にとって母親クラブは如何なる意義をもつかということは、親にとって、あるいは子どもにとっての意義を更に統合した形で考えてゆくところから明らかにされるであろう。要するに、その地域社会に生活する親や子どもの生活が、充実したものになり、横のつながりが強化されて安定したものになることは、その地域社会自体の向上を意味するであろう。

地域社会が荒廃したところに人々の幸福は期待できな

い。しかし、残念なことに、現在の多くの人々はそのことに気付かず、おのれ一人の生活を守ることに汲々とし、その結果おのれ自身の生活をも崩壊に瀕するような状況に追い込んでしまっているのが実情である。こうした状況は、都市のみならず農村にまで及んでおり、かつての如く、地域社会の中に人の和を求めることは、極めて困難になってきている。母親クラブの存在意味は、そうした地域社会の人々の住民エゴを打破し、それぞれが自分の生活を大切にすると同じように地域社会を大切にし、自分達の手でそれを守ることを知らせるために絶好の場となるものである。そして、自分達の生活の向上と充実を母親と子どもとが手をたずさえて行なうことが可能になった時、その地域社会に生活する人々は、人間としての喜びと心の安定を得ることができるようになるであろう。つまり母親クラブの活動は、地域の人々全体の人間性の回復にもつながるものなのである。

4. 家族の機能との関連において

家族がもつ機能と母親クラブとの活動とが如何なる関係で結びつくかということについては、母親クラブの活動の内容によって違ってくるが、家族のもつ養育の機能や教育的機能の強化に、母親クラブの如き地域活動が、大いに力のあることは、そうした機能が、前述した如く、決して一個人、一家庭の力だけで十分な機能を果し得るものでないことを考えれば、当然な訳である。つまり、母親クラブの活動は、家族の強化のためには必要なもので、その不足を補い、子どもの養育や教育を好ましい方向に向けてゆくためには、非常に効果的に働くものである。家族の中のみにとどまった状態での養育や教育には限界があり、広い社会的視野の上に立つことも不可能であろう。新しい時代に即応した積極的な形での育児なり教育は、やはり地域社会の人々との結びつきの中から生まれてくるものである。かつての如く、家族機能の殆んど全てが地域社会との関係の下でなくては考えられなかった時代とは異なり、今の時代では、地域社会をとびこえたところで、家族の機能がマスコミや多くの種類の社会機関と結びついて働いている訳であるが、そうした状態は、家族の機能そのものを、ある意味では非常に歪め、空虚さを常に蔵したものにし、人々の生活を不安定にしていく可能性をもたせることにしている。ここに家族崩壊といわれる現象もおきているのである。母親クラブの如き地域組織活動は、そのような危機的場面から人々を救うものにもなるものといえよう。

V 母親クラブの地域的独自性とその組織化の方向

地域社会の生活に密着した活動展開を目的として、母親クラブは組織化されることが望ましい。活動内容もこの生活に結びついた地域ニーズに即したものであることが必要で、一律に内容の規定をしてはならない。

地域性を前提とした活動は、子どもと親との関係過程を、家庭という場において創り出してゆく契機を培ってゆくといえる。要するに、地域社会のニーズに的確に対応できる活動プログラムが必要であると同時に、その必要性がメンバーである母親一人一人の問題として、受けとめられるべき実感を体得しえていることが、まず第一にあげられる課題である。

1. 子どもを媒介としての母親の連帯

現在版「家なき子」の増加などといわれているように、親の蒸発による子どもの置き去り、家庭崩壊による親の家出、といったものを筆頭に、形骸化された家庭も多い。と同時に、逆に過保護による子どもの成長過程へ悪影響や、働く母親の増加と共に、多くみられる経済的物的なもので親子関係のすりかえなど極めて好ましくない状況下におかれているのが児童の生活の現状である。

一方、核家族化の傾向は、家庭の状態を変容させ、却って児童にとっては、生活の営みの中での人間関係（親子、同胞）を阻害している。家庭は単なる消費の場であり、家庭にある親の姿から勤労の意味を見出すこともできず勤労の体験から児童自らも疎外されている。すなわち、少なく生んでよりよく育てるといった考え方が、児童を受身の学校生活にゆだね、勉強、勉強といって一流校めざしての生活展開を強いている周囲の期待を負いきれない状態に児童はおかれている。こうした状態をふまえて、家庭の機能の責任の再確認と、そこで果しえない役割を補い、又、その家庭の役割を越えて、児童が自由に、伸々と行動できる仲間と場が与えられるようにすることが大切である。児童自身が自ら汗して働く機会も与えられるべきである。このような場作りは、まず母親自身の地域住民としての連帯に基いた意識の基盤を作り出しておかなければならない。

地域社会における母親達の連帯による活動を目的として、児童はそれぞれ児童同志の連帯を身をもって体験していくのである。むしろ、児童の人格形成、特に社会化過程の基本的態度が、母親の地域連帯にかかっているといても過言ではない。連帯といっても、地域社会の範囲が問題となる。又、その限界もある。従って、小学校区を一単位として、その中をいくつかの小集団に

分けていくことが、妥当であろう。まず、保育園、幼稚園、小学校児童をもつ母親の関係を出发点とすることが望ましい。PTA、保護者会などの機会を活用することもよいが、あくまでも母親自身の主体的なかかわりを促進することが望ましい。

子どもの問題には、どんな母親も関心をよせ、その欲求を察直にあらわすことが可能である。一面においては、わが子のみといった感覚も強いことは疑えない事実である。うちの子、よその子を問わず、社会的な視野にたつて、社会の子どもとして日常の地域社会生活で対応できる状態を作り出していくところこそ重要であり、母親クラブの本質といえよう。子どもへの関心のよせ方、その活動内容のプログラムは、あくまでも地域生活の実態を適確にとらえ、その地域社会のユニークな活動展開が望まれる。

2. 母親と子どもとの交流の場作りの契機

最近、親子の交流の場を旅行などに求めていることが多くみられる。とかく親子交流とは、単に子ども達と共に行動することにしか受けとめられていない傾向がみられ、特に都市部に目立っている。親子の交流とは経費を多額に費して何処かへ出向き、ホテルに泊るといったことをいうのではなく、心理的共感を意味する。例えば、朝早く散歩などの機会を利用し、葉の先の露の日光に照らされて色豊かな状況を「きれいだねえ」と共に親子がその美しさに見惚れるといった日常の生活リズムの中に展開されることが肝要なのである。従って、そのような子どもとの共感を持てる場づくり、又は状況づくりが大切である。次に、この日常性の中での親としての子どもへの理解を寄せるポイントをおさえることのできる案地を親自身が培っておかなければならない。形状的に親子の読書プログラムをもったとしても、効果は期待し得ない。その基盤を作り出す親の努力があつてこそ、親子ぐるみのプログラムが生かされるといえよう。調査にもあらわれているように、地域性豊かな行事、例えば「いも煮会」「まつり」「親子運動会」「お弁当会」など、多種多様で、地域特色を生かしたプログラム作成が望ましい。

以上のように、生活の中で児童の文化創造へのエネルギーが発生し、自らの生活を如何につくり出していか、子ども同志の仲間と共に、又、他の家の親と共に、地域住民と共に、体験を通して自分のものとしていく結果をもたらすのである。各家庭、各地域社会に今日まで

伝承されてきた文化が、子ども達に継承され、世代間のつながりを深め、それが地域社会所属意識や連帯を自ら生み育てることにつながるのである。

3. 母親自身の学習の機会

「人の振りみて我が振りなおせ」という格言があるように、母親が家庭に引きこもっていたり、母親の生活の視点を我子だけに集中させていたりしては、親として、子どもに対応する客観性をもつことは不可能である。母親クラブという場を活用する意味は、子どもに対する生活上の諸種の態度、見方、考え方など、多くの同じ子どもをもつ親の経験として、相互に学び合うことにある。更に、それらを受け容れる余裕（心理的に）をもち、親としての人間自身を知る機会となり得る。つまり、母親達が小集団での情報交換をし、その中で共通問題を取り上げ、話し合うことが必要とされる。そして、問題や課題にむかって解決の途を見出し、それを実践することがまづ第一である。母親という共通の立場を

もった者同志の相互刺激と相互受容によって、一方的だった自分子どもへの対応をひそかに反省し、又、これでよかったのだという確認をしたりする。このことが真の学習である。著名人の話を書くことや、研究会、抄読会ばかりが学習ではない。むしろ、上述したように母親自身が主体的に問題にぶつかり、解決の途を絶えず見出していく過程こそ学習である。

つまり、親子の問題、生活上のあらゆる問題など、特に生活に密着した、誰しもが共通にもっている疑問などをとり上げて話し合ったりすることが大事である。一般的な課題では、かけはなれた実態のともなわれないものとなり、関心が具体化しない、具体化される過程に学習の意味があり、学習意欲が生れてくるのである。その状況作りの最も重要なことは、クラブリーダーのあり方、それに加えて行政を含めた指導的立場の人と、その地域へのかかわり方如何が、その方向づけを決定するともいえそうである。

VI 母親クラブの組織上の留意点

1. 行政指導のポイント

行政指導担当者（育成者）が、母親クラブの本質をどう理解し、指導しているか、その姿勢と育成者自身の資質によって、クラブ自体の体質は規定される。例えば、今回の調査対象となった地域においても、ある地域では、親の会として、既存の子ども会との連携という形で母親クラブが地域社会の中で機能しやすいように組織化されている。それは、画一的な母親クラブ像で地域の母親を束縛してしまうのではなく、そこには育成者が地域の独自性を把握し、母親と共にクラブを育成するといった柔軟な姿勢がみられた。しかし、他の地域の中には、全体として上意下達の要素があり、やや行政先導的な感じを受けたところもあった。つまり、そこでは行政側の母親クラブ像をそのまま地域の中に実現するといった姿勢が育成者の中にみられた。このような状況のもとでは、“私達のクラブ”といった主体的方向性、自律性が疎外されてしまう危険性さえある。

ここで、注目しなければならない原則は、クラブの主体はあくまでも母親であり、行政は、その活動を支援するものとして、国、地方公共団体の行政担当者は、母親の積極的行動を啓発するパイ・プレーヤーとして存在するということである。このような原則を基盤として、1) 行政先導型でなく、主体性啓発型の指導の意味を充分に理解することが重要となる。2) 母親クラブに関す

る画一的なイメージを母親におしつけるのではなく、母親自身のニーズ、地域の下位文化を統合した独自のクラブのイメージを探索すると同時に、母親自身の問題意識の高揚を通して、主体性をも啓発していくことが重要である。3) そのためには、育成者は、ただ単に事務的な仕事にとどまることなく、クラブの発展段階に応じた支援をすべく技能を有する必要がある。ケースワーク、グループワーク、コミュニティ・オーガニゼーションに関する知識と技能の修得、地域社会、児童福祉の理解なども重要となろう。4) 以上、ここで指摘した要素を行政指導の中に実現するために、母親クラブの育成という狭義の児童福祉の枠にとらわれず、総合的で、しかも専門的な児童福祉行政展開のための研修プログラムを、行政担当者（育成者で児童館の児童厚生員等）を対象とし、県、国のレベルで開催することが必要不可欠となる。

2. 地域住民の意識の変革とリーダーのあり方

戦後の工業化社会への移行の中で、都市化、核家族化現象が顕著となり、都市地域であろうと農村地域であろうと、生活する人間の連帯性は稀薄になり、異質性、違和感、孤独感を胸の内に感じつつ、連帯し、お互いに支援し合うことも忘れ、逆に他罰的にさえなり、自分の世界にとじこもり、日々の生活に空しさを感じつつも、流されてしまう状態さえ現出している。社会における最後の砦といわれた家族においてさえも、核家族化が進行す

る中で、異心同居家族と称されるような、連帯性を失った個々バラバラの人間が存在し同居するといった奇妙な現象さえ起っている。

今回の実態調査においても「入会時の母親クラブ活動への期待と評価」において、若い母親ほど「子どもの育て方や教育についてより多く学べると思った」、「近所づき合いが深められると思った」の、より個人的次元の安定化を求める期待の割合が高いことが示されている。特に、愛知県県の20代の若い母親には、「地域の子ども達のために役立つと思った」の地域的連帯性への期待が皆無である。

ひとりひとりの母親の安定、更に地域的連帯性の啓発と高揚は、今後、地域での児童福祉活動展開の上で、最も重要な課題として現出してくるであろう。

このような課題を地域レベルで解決していくためには、育成者の資質を向上させると同時に、地域の伝統的な防衛文化に依存している“地域ボス”的なリーダーや、特定のイデオロギーに固着埋没しているリーダー、“何でも屋”的リーダーに育成者や住民がとまどわされることなく、地域における真の必要性を母親と共に探索し、住民主体の児童福祉計画の展開を遂行し得るリーダーの養成が重要となる。

3. 地域性と独自性

母親クラブ活動が展開されている41都道府県のそれぞれのクラブは、その母親が生活している地域的個性性に基づいたクラブの組織化、活動内容の展開が重要となる。

そのためには、まず、地域での日常生活次元に起っている児童の健全育成を疎外している要素、つまり、地域

の個性性に基いた必然性（ニード）の発見と把握がまず行われることが必要である。例えば、長期出張が多く父親不在の多い地域、過疎地域や新興地域の如く児童文化財の不足している地域、大都市の如く人口密度が高く子どもの遊び場が不足し、事故の多発している地域、多くの家庭婦人が内職やパートタイムの労働に参加している地域など、それぞれの地域生活は、個別的な歴史性と文化性の中にあることを常に留意する必要がある。

又、それぞれの地域には、子ども会、青年会、若妻会、婦人会、赤十字奉仕会、老人クラブ、部落会、自治会（町内会）、政治団体、農業団体、社会福祉協議会の指導のもとにあるボランティア・グループ、教育委員会の指導のもとにある社会教育団体など、多くの既存のグループや組織が存在し、地域生活の中で、それぞれに機能している。これらの既存の団体との関係を如何に保つかということも、非常に重要なことである。中には重複する活動もあり、活動内容の調整が必要になってくるであろうが、日頃から両者の間に連絡がうまく保たれ、活動に対する理解が徹底していれば、そうした時の調整も自然に円滑にゆくはずである。どちらがリーダーシップをとるかということで、無駄な争いをしたりするようなことがあれば、地域住民の活動への関心を低め、参加への意欲をそいでしまうであろう。そのためには、日頃から地域組織の団体やグループとは、話し合いの機会をもち、互いに活動をもり上げていく努力がなされなければならない。母親クラブは母親クラブの中だけでという“組織エゴ”に埋没したならば、地域への貢献度も少なくなろう。こうした話し合いの中から活動領域も自ずと明らかにされるはずである。

Ⅶ 母親クラブの運営上の課題

1. 母親クラブの本質

母親クラブの任務として、厚生省児童家庭局は次のような見解を示している。

母親クラブは、家庭の母親に対して、家庭養育について正しい知識と技術を与えることを活動の目標とするものである。具体的には次のようなことを任務とするものである。

- (1) 児童の余暇指導、家庭における児童の養育について正しい知識と技術を母親に対して与えること。
- (2) 母親相互の親睦をはかり、協力をもって児童の育成につとめること。
- (3) 児童館（児童厚生施設）と密接な連繫を保ちな

がら、その他家庭児童相談室（福祉事務所）等施設、機関の活動に積極的に協力すること。

母親クラブは、園児、学童期の子どもをもつ母親が中心になり、地域での親と子の交流活動を通して、相互の協調性を養い、同時に地域的連帯性を啓発しつつ、地域での児童福祉の効果的展開を期待するものである。そのためには、母親が自己の価値観や生き方を、児童に一方に強要するのではなく、共に考え論じ、新しい創造的な生き方を探索する姿勢が必要である。まず母親自身が、共同学習を通じて、現代の社会的、文化的諸条件に埋没することのない主体性を実現することが重要であるし、そのことが、地域の防衛的機制や束縛に埋没することのない健全な児童に育成することにもつながるであろう。

2. 活動プログラムの展開上の課題

実態調査によると、5割強の母親が「月に1回」、2割弱が「月に2回」また3割弱の母親が「夜」に、2割強が「午後1～4時」頃に、2割弱が「午前中」に、更に約5割の母親が「2・3時間」、2割強が「1・2時間」のクラブ活動に参加していることが示されている。

これらのデーターから想像されることは、講演会、映画会などの催物的な行事が中心に展開されているのではないかという懸念である。プログラムの企画やその主催にのみ目を奪われ、やがて今日は何人集った、と頭数を非常に気にするといった表面的形式的な関係に流されてしまっていることはないであろうか。いまここに存在し、刻々と生きている（体験している）人間を見失ってしまっている状況、つまり、クラブがメンバーの人間性を疎外してしまっているような場合、このような規範ができてしまうと、メンバーの発言も形骸化してしまい、真の思いを発言しなくなってしまう。こうなってしまうのは、新しいメンバーの参加どころか、既存のメンバーでさえも、クラブへの魅力を喪失してしまい、やがて、おつき合いだから、義理があるから仕方がない、ということになり、そのうちにひとり去り、ふたり去りと、クラブ自体も解散せざるを得なくなってしまうし、地域的連帯など全く不可能になる恐れもある。

ここで注目すべきことは、「母親クラブは活動を通しての母親のよき学習の場であり、更に母親の成長の場である」ということが、決して行事屋になることでも、知識の切り売り教育に偏向してしまうことでもないということである。つまり、プログラムは目的ではなく手段であり、私達が求めているのは、知識と人間性とその行動が統合化された親と子の人格教育の場であり、人間福祉実現化のための地域的諸活動である。

以上のことを基盤に、先に述べた既存の諸グループ、団体との機能上の相互提携、相互補充計画を遂行することが重要である。

3. 家庭の機能の問いかえしの機会

時代の変化と共に、本来家庭で果すべき機能とされていた一部は、制度として、またその時代の常識として、社会に移譲されていっている。例えば、教育機能は学校に、保護機能の一部は児童福祉施設などへ、時代ごとにより多く社会的養護に移譲されているのである。母親クラブの必要性和独自性は、これらの接点（家庭と社会的養護）を如何につくり出し、バランスをとっていくかが鍵といえよう。

家庭の基礎機能の中での生産と消費の機能のバランス

は崩れており、消費生活の単位として位置づけられた家庭においては、欲求のままに見栄の生活の出現をみている。それが教育ママや、投資の対象としての子どもへの見方が、何の抵抗もなく親達の間で、また社会で通用してきている。それが、わが子への最も愛情をかけている姿であるかのように錯覚をおこしていることが多い。更に、物質的要求が強くなり、それがもとで夫婦関係の稀薄化を招き、社会問題の発生を招いているような憂うべき現実もある。

児童にとって、家庭と社会との関係を適切、円滑に結びつけられた環境の中で育成されていくことが大切なのである。そして、その環境下で日常生活を通して学んでいくことが大切なのであるが、それにもかかわらず、家庭と社会、学校の溝の中に児童は追いやられている。登校拒否や小児ノイローゼ、はては自閉症児と諸種の現象をひきおこしていることは周知の通りである。

新聞紙上をにぎわした子殺し、産み殺し事件の背景には、複雑な問題が潜んではいるが、親としてのレディネスのない状態で子どもを産むはめに陥っていることが多く、親としての養育機能の意味も全く知らないといつてよい事柄が多くなってきている。家庭の固有の機能ともいべき生殖機能→養育機能および性的機能→愛情機能においても、家庭とは別の考え方の中で実際的行為としてなされている例も出てきている。未婚の母の増加なども考えねばならない問題であろう。

母親クラブは、園児、学童期の子どもをもつ母親が実態としては多いが、この20代、30代の母親が中心になり、結婚前の青年期の男女、青年期の子どもをもつ両親、老親など、広い層の参加を得ながら、家庭とは何なのか、その現代的意味を把握していくことも重要である。

4. 研修の考え方、あり方

現在では、母親達の自己研修のための機会は多くもたれているが、母親クラブ員としての研修も是非強力にすすめられることが望まれる。しかし、現在では子どもの養育に関した学習が主であって、地域組織そのものの技術に関した研修などは残念ながら活発になされているとはいえない。その研修もいわゆる押しつけ的なものでなく、母親達が自ら計画し、自らの手で実施してゆくものでなければならぬわけで、形にはまったものから脱け出し、母親自身の生活全体の向上に役立つと共に、地域の中における自分と子どもをはっきり知るためのものでなければならない。

1) 地域レベルのクラブの必然性に関する探索、2) 児童福祉に関する理解、3) 地域の児童福祉を疎外して

いる問題点についての理解，4) 組織，運営方法に関する知識や技能の修得，5) 社会資源の利用方法について講義や事例研究，ワークショップなどの方法を用い，インリーダーの養成が，これからの時代に対応する母親クラブづくりの鍵となろう。

5. プログラム活動推進のための行政の役割

母親クラブは母親を主体とした組織であり，行政は育成者として，パイ・プレーヤーの役割が重要であることはすでに指摘した。

そのための任務として重要なことは，1) 地域社会の住民生活に関する情報を提供すること，例えば，乳児期，幼児期，園児，学童期，青少年期の子どもを有する家庭の実態，名種統計資料の提供，障害児教育への行政の取り組み方への理解と協力の呼びかけ，個人のプライバシー保護に十分な配慮をし，地域の児童福祉実現に関連するデータを整備し役立ててもらふことが重要である。狭義の社会福祉においても，施設収容の支援からコミュニティ・ケアへの方向性が示されているが，これらの領域においても，今後地域の母親クラブの協力が必要になってこよう。2) クラブのリーダーと児童福祉推進者との交流。児童福祉司，家庭児童相談員，児童委員，保健婦，保護司，学校教員など，第一線で活動している

人々との交流をもとに，地域の直面している問題の理解と協力を促す機会を設けることが重要である。3) 以上のことを遂行するためには，民生（福祉），教育，保健，司法などといった中央の監督官庁のナワバリ行政にとられることなく，統合化した児童育成活動を市町村の行政担当者が実現化することが重要である。母親クラブと他の団体との提携活動や協力をうたう前に，まず行政担当者が自らの足元をよくみつめてみること。何故なら，行政機構そのものが，児童福祉実現化を大きく疎外していることが，しばしば起きているからである。4) クラブの諸活動を行う場の確保。児童館，公民館，青年館など，親と子が気軽に，しかも安く利用できる社会資源の整備をし，利用可能な施設のリストを作成するなど，場の確保についての配慮が重要である。将来は地域にある福祉施設も，もっと社会化し，活動の場として利用されることが望ましい。5) クラブの組織の維持，運営に関し，リーダーが各種の問題に直面することは多々ある。行政の側で，専門職員が各種の相談，助言をするといった体制づくりが必要となる。これは，ともするとクラブの管理・統整におち入る恐れもあろうが，先にもふれた如くパイ・プレーヤーとしての役割に留意し，行政先行にならないよう注意することが重要である。

お わ り に

今回の母親クラブに関する研究を通じ，常に強く感じたことは，地域住民，特に母親達を地域組織活動に参加させ，積極的に自主的な活動を展開させていくことの困難さであった。ある地域では行政や町村のリーダーの指示のままに依存的に活動に半ばお義理的に参加する母親がメンバーの大半を占めていたり，熱心な母親の呼びかけに全く応じないで，自分の生活の殻の中に閉じこもっている母親達が，地域に増えているため，活動が龍頭蛇尾に終わってしまっているところや，それぞれ問題の性質に違いはあるにしても，現在のような社会状況の下にあっては，地域住民の自主性に基いた地域組織活動というものを発展させていくには，多くの困難のあることは，地域組織活動に従事する人々の多くが認めることである。しかし，同時にそのことは，それだけに地域組織活動の必要性が如何に大きいかを示しているともいえるわけである。いうまでもなく，子どもは一軒の家の中だけの生活から育つものでなく，あくまでもその地域社会の中の生活の中から一個の社会人として成長していくのである。従って，彼等が孤立した孤独な環境の中での生活

ばかりを強いられるようなことがあったら，社会人としての人間の成長を期待することは，およそ，不可能である。

そこで，地域の人々の連帯が必要であり，互いに手をたずさえて子どもを守り育てていく努力が結集されなければならない。それには，適当なリーダーが必要になってくるし，活動の拠点もなくてはならない。児童館を中心としての母親クラブの活動は，そうした条件を十分にみたすものといえよう。もちろん，そのためには，よき指導者の養成も欠かせないし，他の社会福祉機関との連携も密でなければならないのは当然である。残念ながら現在の母親クラブの活動をみると，まだまだ改善しなければならない問題を多く抱えていることは，前述した如くであるが，それらの問題は，皆の努力で必ず解決のつくものであり，今後の努力に期待するところは極めて大である。

（尚 本研究は，昭和49年度厚生科学研究費によるものである）